

『廣大難思の大慶喜』より抜粋

もう一步進みなさい

四、真仮の水際の立たないのが二十願

五、実機の見えないのが第二十願

六 難信の法を知らないのが第二十願

四、真仮の水際の立たないのが二十願

名号を眺めているのが方便の第二十願で信前の機、名号と一体になったのが真実の第十八願の信後の機である。方便から真実に入るのが真似から本物、贗物から本物、調熟の光明か

ら摂取の光明に生かされるので、初めから真実の者はいません。方便にいる間は、真実は判らないのです。真実に入ってこそ長い闇路を迷うていたことが判るのです。方便とは、他力廻向とは言いながら凡夫の計らいがやまないのですから、いくら他力のように説明して贗てみても、自心建立の心の域を離れることが出来ないであります。

聞いたかも知ったも覚えたも皆凡夫の智慧が合点したのであり、有難いも嬉しいも慎みも悉く凡夫の気持ちに計らわれているのですが、そんな計らいが悉く間に合わなくなつた時、計らいつきて親に計らわれていたことに驚き、間に合わない心が本願の間に合うた、凡智がつきて仏智に生かされた時を、非意業の意業と言って凡夫の思いでない思い、他力不思議の境地、これを不可称不可説不可思議の信樂と言つたのです。凡智がつきて仏智に生かされたのですから、百八十度の大展開、その一刹那をたのむ一念の時といい、「この一念をもつては娑婆のおわり臨終と思え」とか「これを知らざるをもつて他門とし、これを知れ

るをもって真宗しんしゅうのしるしとする」とおおせられたので、第二十願だいじゅうがんの行者ぎやうじゃはその展開てんかいを知らないのでですから、いつとはなしに信仰しんこうを頂いただいたと思おもっているだけで、水際みずぎわも角目かどめも何なんにもわからないのです。凡夫ぼんぶの智恵ちえのなかで、頂いただいたつもりになって合点がってんしているのですから、変かわり目めがないから真仮しんけの分際ぶんざいがわからないのです。凡夫ぼんぶに一念いちねんがわかるか、一念いちねんをいう者ものは異安心あんじんだと思おもったり、言いったりしているが、開発かいほつの一念いちねんを突破とつぱしていないからわからないのです。その人ひとは真宗しんしゅうの中なかにしながら、真宗しんしゅうの不思議ふしぎな味あじを知らしないから、他門たもんとすると仰おおせられたのです。

この一念いちねんの味あじは、凡夫ぼんぶの智者ちしやや学者がくしやの想像そうぞうするようなチツポケな問題もんだいではありません。不可称ふかしやう不可説ふかせつ不可思議ふかしぎの信樂しんぎやうですから、十方じゅうぱう法界ほうかいを丸呑まるのみにした味あじ、すべての罪惡ざいあく悉ことごとくが法悦ほうえつに變かわり、一切いっさいが感謝かんしゃができる身みになるのです。

信前しんぜんの第二だい十願じゅうがんの行人ぎやうにんは、法ほうを眺ながめて他力たうりきではないか、廻向えこうではないか、素直すなおに聞きけと

自分の実機を包んで見ていなかったが、調熟の光明で根氣が熟して、法の鏡に接近してきたから、三毒の煩惱より以外の逆謗の屍の本性が見えてきたのです。自分の心の素顔に驚いたとき、三定死の境地に立つのです。私はない物を出せとは申しません。有る物を有ると素直にご覧なさい。それが仏さまに五兆の願行をさした代物です。それが死んで助かるのではありません。いま助かるのです。いま撰取されるのです、いま即得往生するのです、いま信樂開発するのです。真宗の道俗は素直に聞いていると自惚れているから、逆謗の屍がいることさえも知らないのです。それが見えてきて、真劍に法を求め、三定死の境地に立たされることとが「難中の難これに過ぎたるはなし」です。自分が邪見憍慢の悪衆生であつた、三千世界の悪魔が自分であつたと往生の望みの綱が切れたとき、仏智の不思議に生かされたときは同時であつて、その一刹那の大慶喜は筆舌の及ぶところではありません。天地が転倒したほどの大展開、大自信、大決定心、金剛心、深心、どんなに表現したらよいか、至心信樂

己<sup>おのれ</sup>を忘れて泣<sup>な</sup>くより他<sup>ほか</sup>に道<sup>みち</sup>はないのです。よくも口<sup>くち</sup>が裂<sup>さ</sup>けなかったこと、よくも大地<sup>だいち</sup>が破<sup>やぶ</sup>れなかったこと、大慶喜<sup>だいぎょうき</sup>の裏<sup>うら</sup>には大懺悔<sup>だいさんげ</sup>があります。三千世界<sup>ぜんせかい</sup>のものはみな助<sup>たす</sup>かって、わたし一人は助<sup>たす</sup>からないのだとの信機<sup>しんき</sup>の裏<sup>うら</sup>には、三千世界<sup>ぜんせかい</sup>のものはみな堕<sup>お</sup>ちても、わたし一人は助<sup>たす</sup>からなかったら、親<sup>おや</sup>が泣<sup>な</sup>くの信法<sup>しんぽう</sup>の自覚<sup>だいじかく</sup>がつくのです。これを二種深心<sup>にしゅじんしん</sup>と名<sup>な</sup>づけるのです。第十八願<sup>だいじゅうはちがん</sup>の行者<sup>ぎやうじゃ</sup>には、これだけの自信<sup>じしん</sup>がつくのです。

同<sup>おな</sup>じ名号<sup>みやうごう</sup>に向<sup>む</sup>いていながら、二十願<sup>がん</sup>の人<sup>ひと</sup>は法<sup>ほう</sup>を眺<sup>なが</sup>めているのであり、第十八願<sup>だいじゅうはちがん</sup>の人<sup>ひと</sup>は、法<sup>ほう</sup>と一<sup>い</sup>体<sup>たい</sup>になったのです。二十願<sup>がん</sup>の方便<sup>ほうべん</sup>、信前<sup>しんぜん</sup>の人<sup>ひと</sup>と、第十八願<sup>だいじゅうはちがん</sup>の真実<sup>しんじつ</sup>、信後<sup>しんご</sup>の人<sup>ひと</sup>とは信相<sup>しんそう</sup>のうえに天地<sup>てんち</sup>の相違<sup>そうい</sup>があるのです。水際<sup>みずぎわ</sup>がはつきり諦得<sup>たいとく</sup>ができるのです。

こんな広<sup>ひろ</sup>い天地<sup>てんち</sup>、こんな自由<sup>じゆう</sup>の天地<sup>てんち</sup>のあることを諦得<sup>たいとく</sup>された聖人<sup>しょうにん</sup>さまが「真仮<sup>しんけ</sup>を知らざるものは如来<sup>にょらい</sup>広大<sup>こうだい</sup>の恩徳<sup>おんどく</sup>を迷<sup>めい</sup>失<sup>しつ</sup>する」といわれ、齒<sup>は</sup>がゆくてたまらないから「ひそかにおもんみれば、聖道<sup>しょうどう</sup>の諸教<sup>しよきやう</sup>は行証<sup>ぎやうしやう</sup>久<sup>ひさ</sup>しく廃<sup>すた</sup>れ、浄土<sup>じやうど</sup>の真宗<sup>しんしゆ</sup>は証道<sup>しやうどう</sup>いま盛<sup>さか</sup>んなり、しかるに諸寺<sup>しよじ</sup>の

釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁ふることなし」という大胆な批判攻撃をなさったのですが、この鉄槌は外に向つての攻撃だけでなく、内に向つては第二十願の人たちにも当たるのですが、自分たちは十八願だと自惚れてゐるから、〃蛙の面に水〃で反省するものが一人もいないのです。

## 五、実機の見えないのが第二十願

イノシシを追い出すは勢子の役目です。病原を見出してあげるのは医者役目です。勢子が追い出したイノシシを射止めるのが獵師の役目です。苦を照らし出して樂を与えるのが弥陀の名号の役目です。

六字の名号は、南無は機の方、阿弥陀仏は法の方で十劫の昔に機法一体、願行具足で成就してあつても、それは法体成就の機法一体でありまして、助けるに間違いないと法が成就し

たのです。私が救すくわれているのではありません。助たすかっているのなら、私わたしが知しると知しらないにかかわらず、十劫じゅうの昔むかしに助たすかっているのなら、信心しんじんも安心あんじんもいらなはずです。なぜ信心しんじんを頂いたけ、信心しんじん為い本ほんとか、信心しんじんをもつて本ほんとせられ候そうろうとかいうのでしよう。助たすける約束やくそくはできていても、私わたしに届とどき、私わたしに徹底てつていし、私わたしが満足まんぞくしなければ私わたしのものではありません。聞もん即そく信しんの一念いちねんで仏智ぶつちが満入まんにゅうしたときを信念冥合しんねんめいごうの機法きほう一体いつたいというて、親子おやこの名乗なりがあがり、迷まよいの根ねが切きれるのです。仏智ぶつちが満入まんにゅうするとは、仏智ぶつちの不思議ふしぎが私わたしの煩惱ぼんのうと一体いつたいになるのです。

## 中略

真宗しんしゅうでは機きの見方みかたが足りたりないのです。心こころのなかにどんな化ばけ物ものが隠かくれているか、ご承知しょうちですか。それが臨終りんじゅうでなければ見みえてこないのです。その厄介やっかいな心こころの古狸ふるだぬきを、元氣げんきな達者たっしやな間あいだに照てらし出だしてもらって、弥陀みだの利剣りけんで退治たいじしてもらえ、というのが平生へいぜい業成ごうじようというのですよ。平生へいぜいとは臨終りんじゅうではない、達者たっしやな元氣げんきな間あいだ、業成ごうじようとは業事ごうじじよう成べん弁べんという専門語せんもんごだから、私わたし

が説明すれば一大事業が完成する、望みが契う、大事業が達成できる、ということ。  
人間は無限の欲望があるから、満足を知らない。金でも、名誉でも、あればあるほど欲をおこす。それが一場の夢にすぎないのです。そらごとたわごとに気のついたときは、つぎの世界に出ているのです。早く精神的の満足を得て、人生に受生した有意義な生活をせよということです。

人間は、楽を求めながら苦しんでいるのです。光に向いて進めば、物質の影法師はついてくるのです。光を背にして、物質や名利の影法師を追えば追うほど、走れば走るほど、まだ足りない、まだ足りないと追わねばならないのです。その根本は、無明の闇の心にあるのです。秘密の部屋に頑張っている化け物は、真宗で教えている三毒の煩惱のような簡単な代物ではありませんよ。十八願から洩れた代物が五逆、謗法、闍提、邪見、憍慢、弊、懈怠、私が調べただけがこの七つですが、こんな心はたびたび説明していますから、今は略します。



こんな心があることさえも知らず、素直に聞いていると平気でいるのですから、宗教を聞く器ではないのです。絶対の機が照らしだされていないければ、絶対の法とピントが合わないから一体になれないのです。

機を見るのを嫌うのが第二十願の人で、真実の機が照らし出されて名号と一体にさして頂いたのが、第十八願の行者です。真実の機とは、真実に二通りがあります。仏の真実は真実が真実、凡夫の真実は嘘が真実です。凡夫の真実は、真実がないのが真実です。絶対の不実が知らされた人でなければ、仏の真実に救済された慶びはありません。実機を知らないのが、自惚れ強い第二十願の信前の贗物の信仰です。

## 六、難信の法を知らないのが第二十願

真宗では、他力廻向だから易い、凡夫は難しくてはできない、聖人は「遇い難くして遇う

ことを得たり、聞き難くして聞くことを得たり」と仰せられ、上人も「あら心得やすの安心や、行きやすの浄土や」とおっしゃってあるから易いのだと言っておりすが、実際の御苦労は知らずにお言葉の真似をしたところで、同じ証果を得られるはずがありません。食べたら満腹すると書いてあると言ったところで、食べねば満腹はしませんよ。美談を聞いて感激しても、信じてても、あなたが成功したものではありませんよ。四十七士の本懐を遂げた講談を聞かされて、いくら感激をしても、あなたが白髪首を挙げた境地にはなれないのですよ。暁のうえで素直に聞いておいでになる方には、極悪最下の機類はどんな化け物かわからないのです。五兆の願行をさせ、十劫已来立たしても気の毒なとも思わず、八千遍のご苦労をさしてもすまぬとも思わず、三世の諸仏に証明さしても、ひよつと堕ちはせぬかと疑うほどの強情我慢な人間が、法席に出たときだけ、素直な真似をして、聞き難いの、遇い難いのとよくも厚かましいことが言えますなあ。堕ちる者をお助けと覚えただけではありません

か。墮おちるものが痛いたくもなければ痒かゆくもない、お助たすけと聞きいても、有あり難がたくもなければ嬉うれしくもない、往生おうじようできる人間にんげんが当然とうぜん行けるように横着おうちやくに構かまえている人間にんげんが、どうして難信なんしんの法ほうが味あじわえましょう。あなたの機態きざまは難化なんけの三機さんき、難治なんちの三病さんびようと捨すてられてあるのですよ。それが、色いろもなければ形かたちもない宇宙うちゆうの真理しんりを諦得たいとくされた阿弥陀あみださまの念力ねんりきを、色いろもなければ形かたちもない宇宙うちゆうに遍満へんまんする絶対ぜったいの悪性あくしやうが、見みたよりも握にぎったよりも、なおはつきりと諦得たいとくして一体いったいになることは、これほど難むづかしいことが世界中せかいじゆうにあるでしょうか。一寸先いっすんさきのわからない人間にんげんが、ちよっとお聖教しやうぎやうを読よんでいるときだけ、自分じぶんだけは当分とうぶん死しなないと決きめている人間にんげんが、お説教せつきやうを聞きいているときだけ少しすこ感激かんげきの涙なみだを催もよおしたただけぐらいの信仰しんこうで、久遠劫くおんごうから流転るてんしている古狸ふるたぬきが尻尾しつぽを出だすと思おもっているのでしょうか。凡夫ぼんぷは煩惱ぼんのうがあるから慶よろこべるものではない、とおっしゃるが、救すくわれていないから慶よろこびがでないのですよ。

いくら難信なんしんの法ほうと書かいてあっても、自分じぶんだけは素直すなおに遇あうているのだという自惚うねれがある

から、私がいくら反省を促しても無駄ですけれども、誰かが驚きを立てて求めてくださるだろうと思つて書いています。

一、寿命はなはだ得がたく、仏世また値ひがたし、人信慧あることかたし、もし聞かば精進して求めよ。法を聞きてよく忘れず、見て敬ひ得て大きに慶ばば、すなはちわが善き親友なり。このゆえにまさに意を発すべし。たとひ世界に満てらん火をも、かならず過ぎて要めて法を聞かば、かならずまさに仏道を成じて、広く生死の流れを済うべし。

二、この経を聞きて信樂受持することは、難のなかの難、これに過ぎたる難はなけん。

三、もろもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説きたまう。乃至一切世間のために、この難信の法を説く。これを甚難とす。

四、道俗時衆等、おのおの無上の心を発せども、生死はなはだ厭いがたく、仏法また欣い

がたし。とも金剛の志を発して、横に四流を超断せよ。

五、自ら信じ、人を教えて信ぜしむること、難きがなかに転更に難し、大悲を伝えて普く化することは、真に仏恩を報ずるとなす

聖人は、遇い難い聞き難い、極難の信だとたびたび書いておいでになるけれども、真剣に求道する人がいないのだから、  
《蛙の面に水》  
《糠に釘》  
《豆腐に鎚》  
打ってもこたえない。

それだけ血みどろに求道する人がいないのです。

第二十願の桁にいる人、晴れていない人、信前の人、方便の桁にいる人、真仮の水際のたない人、死んだらお助けと思っっている人、素直に聞いていると自惚れている人、悪い人と口では言っているけれども罪の自覚のない人には、このご文の意味はわからないでしょうが、聖人さまは悶死されますよ、説明してみましようか。

「まことに知んぬ、専修にして雑心なるものは大慶喜心を得ず」本当にそうであつたなあ、名号の独りばたらきと口では言つて称えているけれども、心に不安があり、心を見るのを恐れているものには大慶喜心がない。

「悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雑し、定散心雑するがゆえに、出離その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に歸しがたく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし」

悲しいかな、迷いの凡夫は昔から今日まで、助業と正定業とが混乱し、自分の善し悪しで往生を決めかけているから、迷いを離れることができない。実機をつつんでいるのだから、自ら流転輪廻を重ねて無数の年月を要しても、仏の願力と一体になることができず、大信海に歸入することができないとは、法を聞かないで流転するのなら仕方ないが、聞きつつ、称えつつ、感情だけで体験できないとは情けないではないか、切り刻まれるほど苦し

いぞ、と聖人は歎いておいでになるのです。

「おほよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもつておのれが善根とするがゆえに、信を生ずることあたはず、仏智を了らず、かの因を建立せることを了知することあたはざるゆえに、報土に入ることなきなり」

智者や学者のお歴々、素直に聞いておられる善人は、如来廻向の名号をありがたがって握っておられるから、他力不思議を信ずることができず、自分の智慧に腰を掛けているから、仏智満入を知らず、素直に聞いているものをお救いのように思っているから、悪人正機の本願の根本を知らないから、報土に入ることができないぞ、と誠めておられるのです。

話を聞くくらいは誰でも聞かすが、実地の体験が難しいのです。感情が合点するくらいは誰でもするが、実機が照らし出される人が少ないのです。それに驚いて、求道する人がいない

のです。驚おどろいて求道きゆうどうしようと思おもつても、これを指導しどうする知識ちしきがないのです。知識ちしきに求道きゆうどうして晴はれた人ひとがいないのだから仕方しかたがありません。「国くにに三人郡こおりに一人」とかいますが、大千世界だいせんせかいに満みてん火ひをも過すぎゆきて聞きこうとする人ひとは、殆ほとんどいないのです。昔むかしから妙好人みょうこうにん伝でんに載のるような有名ゆうめいな同行どうぎようは、必死ひつしの求道きゆうどうをしていますよ。難信なんしんの法ほうを聞きき抜ぬいていますよ。難信なんしんの法ほうの味あじのわからない人ひとは方便ほうべん、信前しんぜんの第二十願だいいの行人ぎょうにんというのですよ。